



森の生活（上・下）

H.D. ソロー 著（訳：飯田実）
岩波書店 1995 年

推薦者 教員 松島欣哉

著者のヘンリー・D・ソローは 19 アメリカの著述家で、現代の環境保護思想に先鞭をつけた人物の一人と目されている。本書は、彼がウォールデン湖の畔で 2 年 2 ヶ月の間、独居したときのエッセイである。

レポート課題

本書には彼の環境保護思想は明確には出ていないが、自然の中で独居生活をする彼と自然との細やかな交流が描かれている。彼の自然との交流あるいは随所で示される人間社会批判を読んで、あなたが考えたことを理論立てて説明しなさい。



108 年の幸せな孤独

キューバ最後の日本人移民、島津三一郎

中野健太 著 KADOKAWA 2017 年

推薦者 教員 田中健

20 歳で移民としてキューバに渡ってから、一度も日本に帰らずに 108 歳で亡くなるまで生涯独身で生きた島津三一郎。島津、キューバ日本人移民の子孫、日本に残る島津の親類へのインタビューを通して、歴史に記録されずに消えていくはずだった日本人移民の記憶が浮かび上がってきます。その人生は幸せなものだったのでしょうか。

レポート課題

「生きる」とはということなのか、そして、「生きる」中での「幸せ」について、このノンフィクションを読んだ上で考察し論じて下さい。



患者さんが残した言葉

寺本松野 著 日本看護協会出版会
2002 年

推薦者 教員 清水裕子

太平洋戦争の従軍看護師を経験したマリアの宣教者フランシスコ会修道女・看護学教育研究者、故シスター寺本松野教授（聖母女子短期大学）の晩年の渾身の遺作。結核患者、がん患者の終末を看取った経験から、患者さんが最期に遺した言葉に対してシスターが内声を傾ける応答形式の随筆である。平成 21 年度から 27 年度まで全学共通科目「心と体のケアリング」で使用した書籍である。

レポート課題

本書を読み、「心に残った患者さんのことば」を複数引用し、死までに人はどのように生きるべきかを考え、記述して下さい。

表紙はワープロ（見本添付）、レポートは手書き、ワープロどちらでもよい。

香川大学 ネットプログラム 人間探求（文学作品熟読）プログラム	表紙見本
「患者さんが残した言葉」から	
提出日 平成 年 月 日	
所属学部 香川大学	学部
学籍番号	
氏名	

【お願い】
清水裕子先生に提出するレポートには必ず表紙を付けてください。



物理学は越境するーゲノムへの道ー

和田昭允 著 岩波書店 2005 年

推薦者 教員 久富信之

「物理学で生物がわかるはずがない」「生物物理はいかがわしい」といった非難のあるなかで、自然科学に境界はない、という姿勢で生命の解明に突き進んだ著者により、自身の研究を振り返りその実績を通じて、横断的かつ境界領域の研究にどう取り組むべきか、について語られた著作。

レポート課題

この作品で論じられている日本における自然科学の問題は何か、今後、自然科学はいかにあるべきかについてあなたが最も強く感じた点について自由に論じなさい。



捨て身なひと

小沢信男 著 品文社 2013 年

推薦者 教員 笠潤平

「この道を泣きつつわれのゆきしこと、わが忘れなばたれか知るらむ…ツブラヤ・ニゲロ、人は振り捨てて生きていく」の小沢信男氏が 60 年代の「新日本文学会」の文学運動の中で兄事した花田清輝氏、長谷川四郎氏、中野重治氏や、後に相知るようになった詩人辻

征夫氏の人生を記念する文章をあつめた本である。ぼくは、同会の編集部にいた父から花田氏、長谷川氏、あるいは小沢氏自身の話を、武田泰淳氏、野間宏氏、安部公房氏の話などとともに昔、楽しく聞いた。父もとりわけ花田氏と長谷川氏を深く敬愛していた。確かに文学をするということは、人生を終わって見れば、捨て身に生きることなのかもしれない。幸せなことだけでも。

レポート課題

本書に出てくる作家、詩人について 1 人取り上げ、その作品を 1 つ以上読みそれを踏まえて、小沢氏の文章について考えたことをまとめてください。

思想・哲学



ソクラテスの弁明 ほか

プラトン 著（訳：田中美知太郎 藤澤令夫）
中央公論社 2002 年

推薦者 教員 石川徹

古代アテナイにおいて、ソクラテスは告発を受け公開裁判に臨むことになった。本書は告発に対してソクラテスが弁明する議論を描く。死を恐れることのない真に知を愛する者の姿を描いて西洋の知的伝統の最も根底に存する書である。出来ればソクラテスの死刑までを描いた『クリトン』『パイドン』も読んでほしい。

レポート課題

ソクラテスという特異な人物の生き方について、何故彼が哲学者の代表と言われるのかを考えた上で、自由に論じなさい。

歴史・伝記



市民科学者として生きる

高木仁三郎 著 岩波書店 1999 年

推薦者 教員 笠潤平

2000 年に 62 歳の若さで逝去した高木仁三郎氏が、原子力発電と放射性廃棄物の危険性について真摯で科学的な警鐘を鳴らし、日本の原子力行政を粘り強く批判し続けたことはよく知られている。現在、原発事故の可能性を論じた彼の文章はその正確な予見性によって国内外で改めて多くの人に読み返されている。本書は、同氏がガンと闘いながら、現代における科学者の新しいあり方を探るために苦闘した自己の軌跡を振り返った自伝的文章である。

レポート課題

高木仁三郎は 1938 年に前橋に生まれ、国民学校 1 年の夏に米軍の空襲に燃える郷里を見た。そして敗戦を迎えた。だから彼はいわば戦後民主主義教育とともに育ったのである。秀才だった彼は東大に進み核化学者となる。しかし会社や大学で自分が携わる研究や現代社会における科学者の意味について強く自問する。もし本書を読んで氏の生き方や問題意識に関心が湧いたら自分なりに論じてみてください。よろこんで読ませていただきます。



猿橋勝子という生き方

米沢富美子 著 岩波書店 2009 年

推薦者 教員 笠潤平

本書は 120 頁ほどの小ぶりな本だが、顕著な業績をあげた女性科学者に与えられる猿橋賞とともに知られている世界的な化学者猿橋勝子（1920-2007）の初めての伝記。一読すると、小学校時代の女性の先生の生き方への共鳴から、目指していた医者への道を東京女子医専の面接の際にきっぱりとやめるエピソード、核化学への没頭、ビキニ事件の際の日米の放射性物質の分析競争などを貫く、彼女のまっすぐな誇り高い生き方に尊敬を抱かざるを得ない。

レポート課題

猿橋勝子さんの生き方は、社会の中で人がどのように生きるかということを変更して真面目に考えるきっかけになると思うが、皆さんはどのように感じるでしょうか。彼女の人生に何を思うか、エピソードなどを引きながら自分なりに論じてみてください。



「待つ」ということ

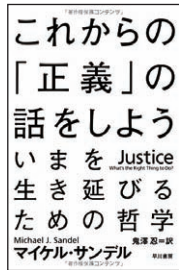
鷲田清一 著 角川学芸出版
2006 年

推薦者 教員 金正貴美

この文学作品は、「待つ」ということが、人にとってどれだけの経験と成熟をもたらすことができるのかということを教えてくれる。そもそも待つということは人にとって苦しいことだ。ひたすら待つなかで待つ人それ自身が与しながら気づいていない何かの訪れは、静寂した心に控えめに指し示され、わたしたちは「待つ」の別の定義にたどりつくようになる。待たなくてもよくなった社会で、待つことへの感受性を高めたい人に読んでほしい 1 冊である。

レポート課題

人にとって待つということが、どのような経験と成熟をもたらすのか、あなたの考えを述べなさい。



これからの「正義」の話をしていよう

いまを生き延びるための哲学

マイケル・サンデル 著（訳：鬼澤忍）
早川書房 2011 年

推薦者 教員 吉田裕美

ハーバード大学のマイケル・サンデル教授が行う講義「Justice（正義）」の人気は高く、テレビ番組でも一般公開された。現実起こった問題として取り上げられる様々な事例には、賛成論、反対論が存在する。背景によって、状況によって、道徳的価値観によって、似たような事例であっても賛否の判断基準や考え方は異なる。「正義」とは何か、古代から現代の哲学者の言葉や理論を踏まえた見解を展開しつつも、この本が勧めているのは以下のことである。正義に関する自分自身の見解を批判的に検討し、自分が何を考え、またなぜそう考えるのかを見極めてみよう。本書では、「正義」に関するアプローチとして、福祉、自由、美徳の三つの考え方の強みと弱みを探り、人間社会における価値観や考え方、人間社会における議論の必要性が紹介される。

レポート課題

人間社会において議論が必要だと思われる問題や事例（自分がこれまでに経験した事象や本文中の事例でもかまわない）を一つとりあげ、賛成論、反対論の立場を考えながら「正義」に関する自分の意見や考えを自由に述べなさい。もしくは、この本全体を通して感じた「正義」に対する意見や感想を自由に論じなさい。



逝きし世の面影

渡辺京二 著 平凡社 2005 年

推薦者 教員 長谷川修一

本書は、江戸時代の終わりから明治の初めにかけて、日本を訪れた欧米人が日本と日本人をどのように見たかを、いろいろな視点から紹介しています。

日本を始めて訪れた欧米人は、日本ほど美しい国は世界にないと日本人と日本人の文化を絶賛しています。しかし、西洋文明を受け入れると、美しい日本文明はなくなるだろうとも予言していました。今一度、外国人の目で江戸時代の日本を見直して、日本の将来を考えてみませんか？

レポート課題

グローバル化の嵐の中、世界から高い敬意を払われる日本人と日本になるためにどうしたらいいのか、各自の考えを述べよ。